

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？



Save The Kikuchi River

昭

和60年頃だったと思いが、淡水魚の研究をしていて先生と一緒に十町川とその支流の浦部川のオヤニラミの生息状況を限なく調査したことがあります。ハエやフナなどは沢山いました。ギユウギユウ(アリアケギバチ)も

まったく居そうな気配はありませんでした。ドンコをやつと1匹捕ることができましたが、ドンコもいよいよこの川からなくなってしまうのかなと心配したものです。しかし最近少し増えてきたようで、5センチ前後の小物などは投網などによくかかるようになりました。ドンコはスズキ目ハゼ科のドンコ属で、ハゼ科にしては珍しく純淡水性の魚です。カジカは似ていますが別の種類です。栃木県、新潟県以西の本州、四国、九州などが主な分布域で、朝鮮、中国、台湾、フィリピン、東インド諸島にも生息しています。

菊池川流域では大きいもので15センチ位までしか見ませんが、他の地域では25センチに達するものも居るようです。淡水のハゼ科としてはカワアナゴ(ナガフチドンコ)に匹敵するような大型種で寿命も長く、10年以上も飼育した例があります。

食性は非常に食欲で魚類をはじめ水中の昆虫、甲殻類など動くものを何でも捕食します。私はウナギの穴釣りをしている時、大きなドンコから指先を噛まれたことも

あります。

流れの緩やかな河川の砂礫底や池、沼、用水路に生息し、昼間は岩石、流木、水草などの陰に潜み、雨による増水時や夜に捕食活動を行います。普段は水底でじっとしているから動作もゆっくりしていますが、小魚などが近づいた時の捕食や逃げるときなどは早い動作をします。縄張り意識が強いので小さい水槽には1匹しか飼えません。縄張りするための縄張り争いか、食うための争いかわかりませんが、私がガラスの水槽に2匹飼っていたら、小さい方のドンコが大きい方のドンコの頭をくわえていたのを見た時は少々驚きました。ドンコを捕まえて持つて帰る途中でも一緒に入れた小魚をくわえていることがあるというから、自分の運命を顧みることもなく、大した度胸の持ち主であるかと敬服する次第です。繁殖期は4〜7月で雄が石の下などを掘って巣を作り雌を誘って産卵させます。雌は巣の天井に米粒大の卵を産みつけます。雄は約

山十町坂本の清流から捕獲したドンコ



1ヶ月間孵化するまで水を送って酸素を供給します。この時期に雄はグーグーとうめき声を出すことがあります。

私達水援隊で昨春秋、十町川から貴重なオヤニラミとドンコを採集しました。数ヶ月間三加和総合支所で飼育されましたが、先ごろとうとう死にました。餌は十分与えてあったのですが、肉食魚どうし狭い水槽ではお互いストレスを蓄積し、長続きしなかったのではないかと考えられます。

地方名はドロボウ(琵琶湖)、ゴウソ(高知)、ドンコロ(宮崎)、コジキマラ(滋賀県)、ドロボウメ、ドカン(近畿地方)、ウシヌスト(和歌山県、岡山県)、クロドンボ(筑後川流域)、ガマドンボ(長崎県)、アナゴモ、ゴモ(鹿児島)、ドグラ、ドンカツチヨ(熊本)など、ドンコ君にしてみればあまり有難くないような名前ばかりですが、それだけ人気者であるということかもしれません。

歴史調査の楽しみ方

日平城跡 13

ひ びら じょう あと

城

山の調査が終わり、10月から、本体部分の測量調査を再開しました。

林道蜻浦線の終点近くに、城名と城歴を記した年代ものの木製標木があります。合併前の菊水町教委が建てたものです。ここから、城跡の中心部へ向かう脇道が延びています。

実は、以前から、林道終点の北側小山が気になっていました。雑木に覆われた薄暗い所で、地形の把握は全く出来ませんでした。何となく遺構の臭いがありました。東下を前出の脇道が通り、西下には、小山を半周する弧状の小道がありました。この小道は、小山の北下で、脇道に合流しますが、この事が、大きな意味を持つていたのです。

この小山の場所を考えてみます。日平城跡は、北向きの山城で、山頂(標高342.2m)周辺に縄張り(標高342.2m)周辺に縄張りが展開しています。これに対して、反対側の南側尾根が、搦め手(裏門)となります。この尾根筋には、脇道が通っています。小山は、その南限にあたる事が分かります。搦め手としては、絶好の地形です。小山上面の標高は312.2mで、南側

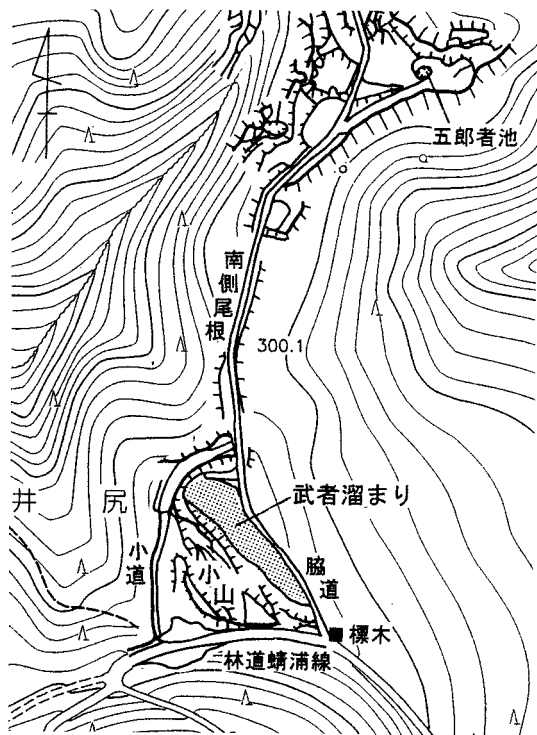
尾根の中央部よりも、10m高い事が分かります。

雑木を伐採すると、小山には、大きく手が加えられている事が分りました。三角形をしており、北側に先端部、南側に底辺部がありました。そして上面域は、西側寄りで帯状に高くなっていました。一方で、東側は、緩斜面でした。問題は、ここです。雑木の伐採が終わると、東側斜面を南東側から北西側にかけて、鋭角三角形状に、掘り下げた事がある事が分かりました。長さ52m、幅は、南東側で括れ、北西側でラッパ状に開いて、最大16mありました。

この遺構を、城郭用語で「武者溜まり」と呼びます。敵勢は、北側の急山腹を避けて、南側の尾根筋から侵攻してくる筈です。この時に、搦め手の南限に造った「武者溜まり」に敵勢を追い込み、一気に叩く訳です。この遺構が、雑木山から現れ

た時は、驚きました。それにしても、大工事です。

ここで、先の小山を半周する西下の小道の説明が必要になります。つまり、小道が弧状を描いていたのは、小山の東斜面を大きく抉って、武者溜まりを造ったからでした。小道はその北端部分では、武者溜まりの肩部の役目も果たしていたのです。底部との高低差は、4.3mありました。そうして、この小道が、城時代の登城道であった事も判明しました。ですから、現在の標木からの直線脇道は、後世のものという事になりました。



周辺地形図(1/2500)



武者溜まり

熊本県立装飾古墳館館長
大田 幸博

(元・菊水町史編纂委員会副委員長)

す。

測量図を見ますと、小道は、鉤型に折れ曲がって、城への入口としては、最良の線形となります。樹型の形をしているのです。今後は、小道に繋がる山道の調査が必要になりました。現時点では、この小山の武者溜まりが、日平城跡の南限縄張りになります。

しかし、これだけの防禦施設を造りながらも現実は厳しく、日平城は、島津勢に攻められて、一日で落城してしまいました。現場を見渡すと、少しむなししい感じがしました。